

『三郡地誌備考』

やまもと ひで お雄
山本秀雄

屋久島は古記録の類が少いといわれている。事実、上屋久・屋久の両町役場・図書館、また識者をたずねても藩政時代とか明治期の文献資料にはなかなかお目にかかれない。

なぜ少いのかと聞けば答えは二つ、一つを庶民資料とすれば、藩政時代・島津藩の政策上、当時島民に学問の機会を与えず、ために庶民の手では記録に残し得なかった。二つには公的記録であるが、そのすべてが「屋久島奉行所」並びに「屋久島手形所」等、役所管理であったことから廃藩置県に際してこれらは焼却されて島内に残らなかったといわれる。慶長十七年(一六一二)島津藩は代官を、下つて元禄八年(一六九五)から奉行を置いて屋久島を管理した。藩政期から明治に至る長期間には行政の達示・調査報告の書類もかなりの量があったろうに焚書の刑とは誠にもつたない話である。

救われることは唯一つ、上屋久町文化財指定の「楠川文書」というがあることだ。残り少なくなった数千年の年輪を刻んで生きる屋久杉



の原生林から太陽が光り輝く様に「楠川文書」は尊い。村民の高い見識に頭を下げたい。

七五三年、遣

唐使吉備真備と唐僧鑑真和上は台風にあつて十一日間を屋久島に滞在し、一五八六年、秀吉は京都方広寺の造営に屋久杉の伐採を命じ、一七〇八年、屋久島に上陸したイタリヤ人宣教師ヨワン・シドッチ神父によって西洋文化交流の扉が開かれたことを知るとき、その時代時代に資料は決して少くなかったのではないか。

たしかに藩政末期から明治の初期にかけて編さんされた「三國名勝図会」「甕藩名勝考」「薩隅日地理纂考」などに多く屋久島の記述を見ることが出来るが、地方文書の類はなく、近年「屋久島御検地名寄帳」「御検地筆次帳」(享保十一年「一七二六」)が慶応大学に所蔵されていることがわかった。今後かように近世資料の発見の可能性があるとは云えない。又期待したい。

この欄は時代の新旧にかかわらず屋久島の書誌文献の紹介にあてるといふ。今回第一回目に『三郡地誌備考』(写本を取上げてみた。明治政府は明治八年(一八七五)全国府県に

その「郡村誌」の提出を命じ「皇国地誌」を編さんしたというが、鹿児島県も要請に応じて明治十五年(一八七〇)にかけて作成して提出したが、それらの原本は大正十二年の関東大震災で消失した。各府県の副本も今日まで保存しているところは少いという。鹿児島県では薩摩地方と大隅の一部(宮崎で日向)に入っていた地方)は保存されるが大方の大隅関係は保

存されていない。従つて屋久島、種子島の分も残念ながら現存しないことになる。鹿児島県史料集(第十七輯)「鹿児島県地誌」を引けば内容は自然、環境、庶民生活の全般に亘り、戸口、性別人口・族籍別人口、耕地、生活ときわめて具体的になつてゐる。

『三郡地誌備考』と「地誌」を比較すると「備考」は「地誌」の下書ではなく、地誌編纂に当つて必要事項を諸誌の中から抜書した綴込みに当りそうである。

手元の『三郡地誌備考』は東大資料編纂所の蔵本を県図書館で写したもののコピーであるが、その20頁(24頁)、又84頁(103頁)に諸誌名をあげて屋久島関係記事を抜粋している。記載の書誌名は次の通りである。

- 1 薩隅日地理纂考
- 2 甕藩名勝考
- 3 日本書紀
- 4 続日本紀
- 5 種子島家譜
- 6 本藩地理拾遺集
- 7 島津右馬頭以久譜
- 8 川上因幡守日記
- 9 地理志

『三郡地誌備考』の特色といへば、この一冊で先にあげた書誌それぞれの屋久島の記事と同様に種子島や大島についても知ることが出来ることであろう。好い資料といえる。